

『考え方』人生・仕事の結果が変わる 稲盛和夫 著 大和書房

著者の稲盛氏は、昭和7年鹿児島県に生まれ、終戦の昭和20年には結核に罹病し、死の淵をさまよひ、更には空襲で家を消失するなど恵まれない幼少時代を過ごしたという。戦後貧窮するものの家族の協力と周囲の進めにより高校進学を果たした。高校卒業後、希望した大学医学部には合格できなかったが、地元の大学で工学を学んだ稲森氏は、碍子製造会社に就職した。

その後稲森氏は、昭和34年に京都セラミック（京セラ）を、また昭和59年には第二電電（現KDDI）を設立した。さらに平成に入って多額の負債を抱えて経営破たんした日本航空を短期間で再建したことは、あまりにも有名な話である。

この本には、稲盛氏の持論が数多く書かれていて、箇条書きに書かれた見出しは、とても見やすいものである。

「当たり前なこと」と思うことが多々書いてあり、見方によっては、つまらないと思うかもしれない。しかし、読み進めて行くと奥が深いことに気が付くだろう。

人間は、生を受けてこの世に生まれてから死を迎えるまでの境遇は、さまざまである。一方では、何一つ不自由なく生活しながらも不平不満を言って生きている人がいれば、他方では、どうして自分だけが、こんな目に合うのかと？と人生を恨み嘆き続ける人もいる。自分は恵まれていないと悲観した考えを持つと、「自分だけが何故？」と負のスパイラルから益々自分を追い込んでしまう。そんな時に、考え方をプラスに進めるか、マイナスに進めるかでその後の人生は大きく変わってしまう。

人間は、植物と同じで「早生」と「晩生」二つのタイプがあるという。最初から利発で聡明なタイプの間人もいれば、初めは勉強ができないけれど、少しずつ頭角を現していくタイプの間人もいる。小さい頃、他人と比べあまり勉強ができなくとも悲観することはない。自分は遅れて成長するタイプだと考えて、努力する気持ちを持てば良い。

今日一日を一生懸命に生きれば、明日は自然に見えてくる。明日を一生懸命生きれば、一週間が見えてくる。一週間を一生懸命生きれば、その先が見えてくるという。その瞬間ごとに全力を傾注して生きることが大切である。

しかし、人間は弱いもので、毎日コツコツと進んでいても時として壁に当たり、心に邪念が走る。そうすると自分を正当化する「言い訳」が登場することがよくある。

挫折しそうな時は、見方を変えてみる。創意工夫をするに限る。自分の夢の実現のためには、コツコツと続ける日々の地味な努力と工夫の積み重ねが必要となる。

人は、上を見れば限りないが下を見ても限りない。長生きする人もいれば、病に伏して若くして亡くなる人もいる。また、親の命と引き替えで生まれてきたという人もいだろう。縁あってこの世に生まれて来たのだから、人生なめずに日々命に感謝の心を持ち、前向きな「考え方」を持ち続け大切な人生を全うしたいものである。